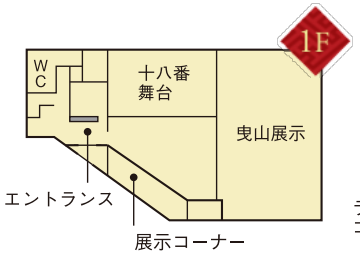
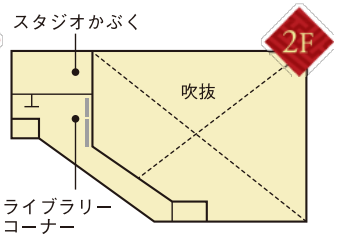
館の愛称である「みよっさ」とは、
「～してみようよ」と呼び掛けの時に使う小松の方言です。
展示されている曳山や伝統芸能の発表を
「見る」という意味も込められています。
「行ってみよう」、「伝統芸能に触れてみよう」、
「体験してみよう」…。
訪れる人がさまざまな楽しみ方や意味を
見つけられる施設です。

十八番舞台





お旅まつり

小松市浜田町の菟橋（うはし）神社と同市本折町の本折日吉神社の春季例大祭。小松城に隠居した加賀藩三代・前田利常寄進の神輿（みこし）が大獅子、子供獅子とともに城下を巡行し、小松の繁栄を祈ったことが由来とされます。その神輿が渡り歩く様子を「旅」するといい、「お旅まつり」の名称になったといわれます。

曳山と曳山子供歌舞伎

小松のまちが飛躍的に発展したのは一六四〇（寛永一七）年に、前田利常が小松城に入ってからです。武士とその家族、商人・職人が住み、一時一万人近い城下町となり、今に伝わる諸産業が発展します。

特に絹織物が大きな富をもたらし、高い教養と粋をそなえた町人たちによって茶道や能などの芸術文化の華が開きました。

お旅まつりで上演される曳山歌舞伎は豊かなこの町人文化を背景に一七六六（明和三）年頃、龍助町と西町から始まったとされます。現在は市内の八町が曳山を所有し、毎年当番の二町が上演を行います。